

あなたに



高田敏子

詩集 あなたに 新装版

初版・一九七五年十二月二十五日

四刷・一九七七年七月五日

著者・高田敏子

装画・堀 文子

発行者・辻 信太郎

発行所・株式会社サンリオ

東京都品川区西五反田7の22の17 TOCビル1F

電話 東京(四九四)五三三三 振替東京八四一七一

印刷・創巧社

製本・今泉誠文社

定価・六八〇円

(分)0392 (製)75062 (出)2831

あなたに

*

目次

☆美しいものについて

美しいものについて 10

紅の色 12

ぶどうの村へ 14

ほおずき 15

カモメ 16

海 18

秋の蝶 20

すすきの原 22

寺の秋 24

白い灯台 26

愛の日に 28

☆花

花 32

秋の日のクッション 35

夾竹桃 37

一りんの花 39

花の下 41

雪の日 42

わらべ歌 43

十五のころ 45

冬の詩 48

星 50

木枯しの夜 52

☆月日

新しい年への願い 54

春の雨 56

さむい夜は 57

春の日 59

信濃の春 61

高原の朝 62

夏のあと 64

落ち葉の道 66

一つの駅 68

すす虫 70

秋の夜 72

枯れ葉 74

雨の日 76

ひとり遊び 78

窓の下 80

すずめ 81

☆旅・子供

子鹿 84

ロバ 86

笛 88

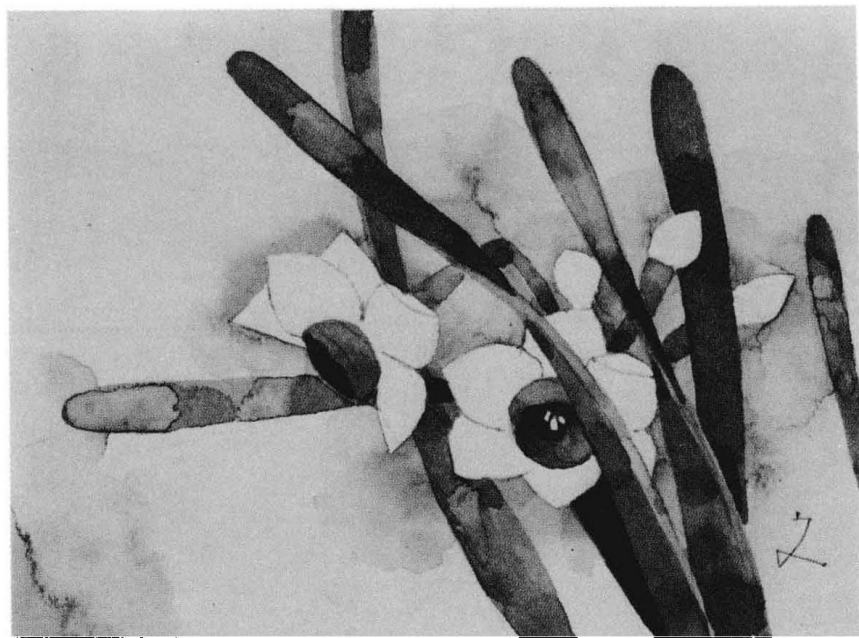
ひとみ 89

公園 90

裏町 92

影	94
入江のカヌー	96
赤い機関車	98
白い穂波	100
糸車	102
お墓	104
写真	106
旅のころ	108
あとがき	110

美しいものについて



美しいものについて

花は咲く 誰が見ていなくても
花のいのちを美しく咲くために

小鳥は歌い 空を飛ぶ

小鳥は小鳥をよろこび生きるために

樹は茂る 魚は泳ぐ

樹であり 魚であることのために

人は

人であるそのことのために生きていくかしら？
人は人であるそのことを

いつも思っているかしら？

きのう 私がしたこと

きょう 私がしようとする事

人であるそのことにかたく結ばれているかしら？

樹や花や小鳥や魚のように――

人であるそのことを美しく生きているかしら？

樹や花や小鳥や魚を

美しいと ただ見るだけではなくて

紅の色

やさしさとは

ほうれん草の根元の

あの紅の色のようなものだと

ある詩人がいった

その言葉をきいた日

私はほうれん草の一束を求めて帰り

根元の紅色をていねいに洗った

二月の水は冷めたい

冷めたい痛さに指をひたしながら

私のやさしさは

ひとりの時間のなかをさまよっていた

ぶどうの村へ

トンネルをくぐる列車の

窓ガラスをかがみがわりにして

髪を調えている娘さん

列車は次々にトンネルに入って

娘さんの髪は調ってゆく

口紅もきれいにぬりかえられて

私にむかってにっこり

ほえんだ娘さん

駅にはきつと いい人が

迎えにでているのでしょね

山脈がひらけて

ぶどうの村はもうすぐ

ほおずき

包まれているもの
おおわれているもの
かくされているもの
を 開くときの
心のときめき

少女の日の
ときめきを
よびもどし
手にのせる
ほおずきの紅の色

カモメ

海ぞいの町の電線に

カモメがならんでいる

行儀よく みんな同じ方向にむかって

カモメたちは

風の吹いてくる方向にむいて羽を休めているのだった

なんて鳥はおしゃれなのでしょう

みんなああして風にむかって休むのね

私だって風に後から吹かれて髪がさか立つのはいやですもの

私のひとりごとに

後から若者の声がした

いいえ おくさん

おしゃれのためではありません

獲物を見つけたときにすぐ飛びたてるためなのです
敵に襲われたときも素早く飛びたてるためなのです

若者は そして

風速と飛行についてを語りだした

海からの風にむかって

私たちもならんで坐っていた

若者の服には魚の匂いがしみている

海

たくさんの魚が泳いでいるように
たくさんの貝が棲んでいるように

あの波の下 海の底には

私たちの放した さまざまな言葉が
生きつづけているように思われる

沖にむかって「おーい」と呼びかける子供の声も

小さな魚になって泳ぎつづけているでしょう

一日 砂浜に坐って

問いかけ くり返した私の言葉も

巻貝になって沈んでいるでしょう